

献 辞

2004年3月末、広島修道大学人文学部のお一人の教授が定年をもってキャンパスを去られた。人間関係学科心理学専攻の高木敬雄名誉教授である。

本『広島修大論集』（第45巻第1号、2004）が高木教授のご退職記念号として刊行されるに際して、同教授のこれまでのご業績などをご紹介し、献辞に代えさせていただきたいと思う。

高木教授は、1970年4月、本学の前身である広島商科大学に「心理学」担当の助教授として就任された。その後、本学は1973年に英語英文学科と人間関係学科の2学科からなる人文学部を増設し、人間関係学科は心理学・社会学・教育学の3専攻をもって構成された。この年から先生は人間関係学科心理学専攻の専任教員として教育・研究に精進されることになる。なお同年、大学名称も広島商科大学から広島修道大学へと改称され、さらにその後本学は法学部・経済科学部等を設置し今日に至っている。この経緯に照らして言えば、高木先生はご就任以来本年3月末までの35年間にわたり、人文学部の歩みとほぼ軌を一にして、そしてその先頭に立って歩んでこられたと評することができる。しかも、先生は学部・大学院での教育・研究のみならず、大学運営や社会的活動をとおして、本学の発展に大変貢献されてきた。これら諸分野でのご業績は、月並みな言い方ではあるが、まさしくいぶし銀の輝きを放っている。

高木教授は、幅広い心理学の研究分野にあって、主として知覚心理学研究を専門領域とされている。その研究テーマの核心は、これを特徴的に表現すれば「錯視」研究の「高木」とも言えよう。この分野の研究成果の蓄積のもとに、学部教育においては「心理学原論」・「知覚心理学」等の授業科目を担当された。大学院においても知覚心理学に関する院生の教育は無論のこと、「知覚心理学特殊研究」指導などをとおして若手研究者の育成にも寄与された。その研究成果は『ポンゾー錯視の実験的研究』（広島修道大

学研究叢書, 1994), 『錯視的輪郭の明暗知覚』(広島修道大学研究叢書, 1999) などの単著をはじめ, 多数の共著として公刊されている。また, 論文としても初期の「色の知覚」(広島修大論集第14巻2号, 1974) から「視覚のシナリオ」(広島修大論集第31巻2号, 1990), さらに近年の「認知心理学とは何か」(広島修大論集第43巻第1号, 2003) など60数点におよぶ論文が発表されている。

また, 先にふれたように, 同教授のご退職までの大学運営や社会的活動における貢献も大きい。その詳細は紙幅の誓約もあって残念ながら控えねばならないが, 例えば1982年以後1989年までの間に8年間は本学総合研究所の次長・所長として, 1989年から1990年には教務部長として, さらに1990年代半ばには大学院人文科学研究科科長としてご活躍された。社会的諸活動においても例えば広島県中央児童相談所の判定課嘱託として, 広島県環境計画協会会員・理事として, あるいは広島市交通事故防止検討委員会委員など広範囲にわたって活動されてきた。

最後に, 私の心象に刻印された高木先生は極めて物静かにして温厚な, しかして強靱な「意志」の人である。今後のご健勝とさらなるご活躍を祈念してやまない。

2004年6月 人文学部長 森 川 泉